一 円 当 億

小 田 良 平*

一騎当千という言葉がある。昔は騎馬にうちまたがり鎧、兜に身を固め、長柄の長刀をひっさげて手当たり次第に敵を打ち倒した勇将をさしていった言葉である。古い言葉は尊いもので、大きく変化した今日においてもその意味は十分に通じるものであって、私はなにもこの尊い言葉を破棄しようとするつもりはないが、現代的に別の言葉を考えたのが一円当億である。

一円とは一人一人の人間を指すものである。なぜ一人の人間が一円かというといったって浅い意味しかない。日本の全人口が一億であり、その中の一人であるから、かりに一円硬貨で一億円のお金があるとすれば（実際にどれほどの容積になるか計算すればすぐわかることであろうが）そのかさ高い一円硬貨の山からつまみ出した一枚の一円硬貨が一人の人間であると考えることができる。もう少し、深い基礎から考えても人間一人は一円に当たると考えることができる。すなわち、われわれ人間が住んでいるこの地球はできてから 25 億年ばかり経過しているといわれている。そしてわれわれ人間は長寿を得たとしても 70～80年の間この地上に生を受け、しかも真に活動しうる年月はほぼ 25 年間と考えてよかろう。人によっては 40 年間くらいの活動期があるかもしれないが、細かい計算は別として、25 億年のうちの 25 年間とするとやはり一億円の中の一円ということになる。このように考えるとわれわれ一人一人はいかに微々たる存在で、はかないものであるかと嘆かざるをえない。

しかしながら一億円というお金は現在では日常茶飯事となっているのである。月商一億円の商売といえば小企業の域を出ないものであり、人間一人が一億円のお金を動かすということもむずかしいことではない。また、研究者が良い研究成果をあげれば、その成果は時には何十億円という金額で評価されうることもあるのである。最近ハルコンプロセスによるスチレンとプロピレンオキシドの合成の技術輸入に約 40 億円のお金が支払われると聞いている。ハルコン法を開発した研究担当者はそう多くはないはずであり、主働者はたぶん一人であろう。このような例から見ても人間一人が億の単位の仕事をすることができ、世の中になってきているのである。渺たる一円硬貨の人間が億に該当する仕事をなしうるのであり、その意味で現在は一騎当千の世でなく、一円当億の世の中であると私は考えるのである。

もちろん、昔、一騎当千の強者はそう数多くいたわけではなかろう。同じように、現在において一円当億の鋭者には、誰もかれもなれるものではなかろう。しかし、研究を志す者、研究に携わっている者、また、工場での技術者の一人一人がわれこそ一円当億の強鋭者になろうとする心がけ、意気が必要なのではなかろうか。そして一人でも多く一円当億の実績をあげる者が現われたならば、世の中はさらに栄え行くことであろう。特にファインケミカルズがやかましく叫ばれている今日の化学工業の分野において、そのような可能性の確率が高いことが希望され、また、実際に決してむずかしいことではないように私は考えるのである。

* Ryohei Oda 京都大学 (606 京都市左京区吉田本町) 名誉教授・工博